

ネパール訪問記

会長の森田です。

私たちは今年3月ネパールに100台の子ども用車いすを送りました。

現地から車椅子到着の知らせが入りましたので6月26日から7月4日に掛けて会を代表して訪問してきました。

そのネパール訪問記を報告します。

訪問の目的

1. カトマンズ西方200kmに位置するポカラにあるINF（インターナショナル・ネパール・フェローシップ）にお届けした100台の車椅子を確認、その後の管理体制とその必要性の有無の確認をする。
2. カトマンズにあるJICAを尋ね、現地のNGOや現況情報をお聞きする。
3. ネパール各地に点在するCBRを訪ねて、障害児童の現況と課題点をつかむ。特に、初期から連絡のある首都近郊バクタプール、西部ポカラ、南部ルンビニー付近を調査し、情報を得る。

1、ポカラ、INF

私たちが送付した車椅子100台が本当に届いたのか、実は半信半疑の気持ちで現地入りした。カトマンズを出発して一般道を走り出した車は、西に向いたものの、がけ崩れによる落石が立ちはだかり、大雨による出水が道路に流れ込み、私たちの行くてを阻んだ。この国にはトンネルも信号も標識もないうえ、ガードレールも少ない。アスファルトは穴だらけで補修の跡もない。トラックが横転していたり、マイクロバスが崖に突き刺さっていたり、道中が無事ですむのか心配であった。



ポカラに入ったものの、INFの所在がわからない。何度も現地の人に尋ねて到着したのは3時ごろ。INFは広大な敷地に緑が深く、疲れた気持ちがやわらいだ。なにより静かであった。私たちの送った20フィートコンテナも地面に敷かれたコンクリートの上にきちんと置



きちんと置かれたコンテナ

かれていた。通常コンテナは空になれば返すものだが、このコンテナはなんと買取り。中古ではあるがその額は送付費用の 22 パーセントを占める。ネパールからの帰りの便はないため買取りとなったのだが現地で倉庫としてでも活躍してくれることを願っている。

引渡しの式典は講堂で行われた。代表のプラカッシュ氏は不在であったが、豪州から来ているというポール・ローシェさんをご挨拶してくださいました。

その後車椅子に乗った子供たちが入場して、なんとも場がなごんだ。



私もお挨拶をし、「遠く日本から皆さんに会うために来ました、私の子供も車椅子に乗っていますが、外に出たい、自由に動きたい気持ちはどこの国の子供も同じです」と心情をお伝えしました。INFではぜひ次回もお送りいただけないかと再三お願いを受けました。できるだけ、実現できるようにいたしますとお答えしましたがなかなか苦勞が多いこともじつはあります。

最後に「君はグルンか？」と妙な質問がありこちらも「？」どうもチベットから来たグルン族が日本人の顔にそっくりなことから、誰かが冗談を飛ばしたので、「グルンに近い純日本人らしい」とお答えしたところ、一同大爆笑でした。

2. CBRポカラ

同じ市内にあるはずのこの施設ですが、多くの人に聞きながら、ようやくたどり着いた。JICA 派遣の武藤さんに施設を案内していただいたが、少なくとも50台は必要だろうとの見解でした。ここでは、簡易型装具(靴)の作成をして、木型がいくつも並んでいた。隣の部屋には足踏み式ミシンがあり、布地補修ができるようであった。



3. CBRバクタプール

カトマンズからタクシーで向かう。しかし、タクシーの運転手が場所を知らない。通行人に聞いてから車が動き出す始末。きわめつけは、交差点の真ん中で車を止めて、警官に聞いている。それでもたどり着けないので、高校の前で停車、私が教師をまきこんで道案内をさせるといふ珍道中になる。何とか無事到着。

ここバクタプールがCBRとして最初の施設だそうだ。ここで車椅子を受け取っても、まとまった数を置くスペースの問題が出るという。

隣接する障害児が通う施設を見学。自作の座位保持装置が10席以上あり、日本から送られたトイレ訓練用椅子があり、それを模したものが2席あった。車椅子は二台。これは以前、駒場さんからいただいたという。圧倒的に車椅子が不足していることがよくわかった。座位保持は作れても車椅子は作れない。その前に素材がないことは容易に想像がつく。



4. JICAカトマンズ

喧騒と誇りまみれの市内の小高い所にビルがあり、強引に面会を希望して、NGO担当の有馬氏と懇談しました。当会活動のご説明とパンフレットを渡して、今後現地情報と状況が不明の場合はご協力を依頼したところ、帰り際にネパールにおけるNGOの書籍をいただきました。

5. 南部ルンビニー付近で

ブッタの生誕地ルンビニーにあるC B Rに行きたかったので探した。コピルポストゥー市付近でC B Rがあることはわかったのだがまだ距離があるという。今日中にカトマンズに帰還できなくなるのであきらめてこの平原地帯を去ることにした。どこまで行っても田んぼが続き、信号ひとつなく、車で走るには気分が良い。しかもここに住むネパール人は、ベンガル系独特の彫りの深い顔立ちと肌の黒さが引き立ち、何かインドを連想した。貧しさと時代から取り残された感のあるこの地では、一般人さえ生活が成り立たないのだとネパール人から教えていただいた。きっと、身体に障害があったならば、大変なことであろうことは想像するに余りある。

私たちの送った車いすがこの国の人々に何ほどかの役に立つことを願って帰国した。

コラム

ねばーる 岳麓国見聞録 (ずっと曇りで岳は見えず麓のことばかり)

1. ホテルの冷蔵庫内にあるジュースが、電気がないので生ぬるい。
のどが渴いたので、栓抜きでスプライトの栓を開けて飲んだら味が変だ。
よく見たら王冠がさびている。錆も一緒に飲んだということ。鉄分補給！？ トホホ
2. 現地でスケジュールがいっぱいでいらした。車で走行中に床屋に行くことに決定。
ドアのない床屋。最初に値段を聞いたら200ルピー。安いのか高いのかわからん。
ドライバーに聞くとぼったくりだという。そこで二軒目に挑戦。
40ルピーだ。30円でさっぱりした。しかし、頭は洗わない。「だんな、マッサージもいかが？」
というからお願いした。むやみに髪の毛を引っ張る。やめてよ貴重な私有財産なんだから、
トホホ。結局100ルピーでした。80円。これなら安い！
3. ホテルで体を洗うのにお湯が出ない。頭にきてホテルを変えた。結局お湯がでない。
だったら蛇口を作るな、期待するだろうが。(当事者が一番期待しているのかもしれない。
いつかきっとネパールにも蛇口からお湯の出る日がくるだろう、と)
4. たまには外食。散々カレー臭(加齢臭ではない)にあきたので、中華に挑戦。
期待をしたが、ネパール流中華なので、やっぱりカレーっぽいのは同じ。そういえばお米が
変だ。細長いインディカ米だ。
あげくに突然停電して、真っ暗に。私の気持ちも真っ暗に。トホホ
5. びっくりした。野犬が走る車をおいかけて吠えたてる。何回も経験した。車じゃなかったら
噛み付かれている。こんな風景は今まで見たことがない。
5. 牛の解体を道路脇でしている。グルン族だ。肉屋もないので、みんなで話し合ってお金を出し合い買った牛を一頭まるごと道の脇で解体しているのだという。見たことがないので、

車から降りて写真を撮っていたら、牛の生首を記念に持っていけと差し出された。これには参りました。

7. 南部に行ったら、少年たちが木に石を投げている。何ごとかを見るとマンゴーをとっていた。マンゴーの木が道路わきに街路樹のようにたくさんあってうらやましかった。ネパールのマンゴーがとてもおいしいことは知っていたので本当は私も石を投げたい。
8. 夜、どんなに走っても信号も街灯もない。だから時速80kmで飛ばしても、ストップがない。一時間走っても二時間走っても、真っ暗な闇の直線だけの道、その闇から突然人影が現れたりする。正直、怖いと思った。それが深夜でも同じでした。
9. 不思議なことに、崖がくずれようが、家の前に大きな落石があろうが、絶対に片付けない。路上で死んでいる犬も片付けない。そんな光景は何回も見た。信じられない。カトマンズもごみだらけ。誰も片付けない。平気でみんなごみを路上に捨てる。
10. いろいろな意味でガラパゴス状態だが、カトマンズを走る車の古さは自慢できる。50年選手も現役。もう博物館級。排ガスも未整備車両だらけで、のどは痛いし、気管支が危ない。黒いマスクをしている人が多い。とにかく排気ガスはすごい。
11. アスファルト道路なのに、両脇に土の部分が残る。雨が降れば水がたまりぬかるんでいる。乾けば土が舞い上がる。雨水を流す側溝などないのだ。
12. カトマンズ郊外のパタンに行った。レンガ造りの家を見て、あまりの古さに腰が抜けそうになった。2000年くらいバックした気持ちに。翌日のバクタプールは、さらに古く、もう紀元前じゃないかと思うほどだった。
13. CBRの帰りにお寺でも見ようとして入り口に入りかけたら、外国人だけ有料ときた。受付で国籍を聞かれたので、「えっ、国籍で料金が違うのか」「はい、日本人1200ルピー、チャイニーズ800ルピー、ロシア500ルピー・・・。」聞いていたら心底腹が立ってきた。馬鹿にするな！なんで日本人がそんな高いんだ。思わず日本語で大きな声を出してオールキャンセル！あーすっきりした。しかし日本人は金持ちだと思われているのか、はたまたなめられているのか。



カトマンズ市内

初めてのネパール、外国とはいえ私が普段思うこととは全く違いました。自分の中の常識が崩れそうになる。それでも、街角を曲がるとすぐ違う顔を見せるからあきない、否あきれる？！

「どうですか森田さん、ネパールの印象は？」ガイドしてくれた現地の人へのこの問いに「美しさと汚さが同居した国だと思います。」

彼は深くうなずいていました。

おもしろうて、やがて悲しきネパール国。でも、また来てみようかな。